
IS ~ 黒の座天使 ~

鳴海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS〜黒の座天使〜

【Nコード】

N8442Q

【作者名】

鳴海

【あらすじ】

就活の真つただ中で転生した主人公・橘浩之。転生したのはアニメの最新話を見逃した『IS』の世界。彼が進む道は？そして、「力」として選んだ座天使の示す先は……

プロローグ1（前書き）

初めまして、初投稿になりますので暖かい目で見ただけだと
幸いです。

プロローグ 1

「くそっ！あの面接官、最後のほう話聞かずにタバコ吸いだしやがっつてー！」

まだ着慣れないスーツ姿で初めて来た地方都市の道を歩く。俺と橘浩之は就職活動という戦争に未だ身を投じている学生だ。戦争などというと笑い話になってしまいそうだが、当人たちにとっての心境としては決して笑い話では済まない。氷河期と言われるだけあってさすがに世間は厳しい。引く手数多だったという親世代が本当に羨ましくなる今日この頃だ。

「これでもうすぐ3桁の大台か。そしてまた野口さんか樋口さんか諭吉さんが財布から旅立つのか・・・こっちもある意味恐怖だな。」

地方の寒空だけでもやっつけられないのに、こっちも厳しい。本当にやっつけられなくなりそうだ。おそらく今の会社もダメだろう、というか未来の上司がアレだと正直不安なものにも程がある。期待するだけ損だと気持ちを切り替え、移動手段の電車の出発時刻を確認する。

「まだだいぶ時間があるな。ならせつかく来たんだし、その辺うろ付いてみるか。面白そうなものがあるといいんだけど。そういえば今週のISまだ見てなかったっけ・・・」

そんな独り言を言いつつ、知らない道を進む。駅の方角を確認しつつも、音楽を聴きながら適当にぶらつく。しかし、それがいけなかった。周りの音が聞き取りにくい状態、土地勘のない場所。そし

て、ここまですれば言わなくてもわかるであろう猛スピードで道路から外れた一台の自動車。気付いて振り返るとすでに自動車は目の前に迫っていた。咄嗟のことで足が動かない。俺はなすすべもなくそのまま宙を舞った。

(せめて親を安心させてやりたかったな……)

最後の瞬間に考えていたことが両親のことだったのは親孝行なのか、それとも親不幸なのか俺にはわからない。そのまま、俺の視界はテレビの電源のように「ブツン」と消えた……

(はずなのにどういふことだ、こりゃ……)

今、自分の目の前に移るのはパパだのママだのと俺に呼びかけている俺と同じくらいの男女。そして、見渡した時に見つけた近くの鏡に映る赤ん坊の俺。

(マジですか。「冗談では済みそうにないよな。)

この日俺はまた「俺」を始めた。

プロローグ1（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。赤ん坊からということになりましたが、できれば早めに原作に入りたいと考えているのであと2、3話くらいで突入するように予定しています。しかし、初めてのものもあって少し狂ってしまう場合もあると思いますので、ご理解ください。感想も気軽に書いていただけると幸いです。できればお手柔らかにお願いします。

プロローグ2（前書き）

とりあえず、ここまですがプロローグとします。急ピッチなので混乱されるかもわかりません。できれば楽しく読めることを祈ります。

プロローグ2

赤ん坊としてやり直して、早10年。私こと橘浩之はわたくし両親の遺影を抱えて葬儀に参加していた。両親が前世の私と同じ交通事故だったのは、これまた嫌な縁だと思い、神がいるなら呪おうと一晚中泣いた。たとえ十年という短い時間であっても両親であったことには変わりなく、愛情を注いでくれたことにこれ以上ないほど感謝していた。過去の死に関して月日がたてば受け止められるのは言うまでもない。そんなどうでもいいことを考えつつ、両親との日々を振り返る。

(本当に良い親だったな・・・)

二人目の両親は形は前とは若干違えど、本当に良くしてくれた。まだ若いながらも父親が亡き祖父から継いだ会社の社長として精を出し、母はそんな父と俺を支えてくれた。

(それにしてもここが『IS』の世界だったことは、今でも実感が湧かないな)

きっかけは小学校だった。クラスに「あの」一夏がいたことからだ。最初は偶然だと思った。一人くらいライトノベルの主人公と同じ名前の人間がいても、不思議ではないと思ったからだ。しかし、その考えは「篠ノ之箒」と後の「IS」の発表によって完全に覆われてしまった。嬉しかったのは言うまでもない、数年前に好きだったアニメの世界の人間として自分がある意味これ以上ないほどの夢だ。例えこの世界が自分の生きる新しい世界だと理解し、割りきっていても、その感情は残っていた。ただそれよりも先に自分がここで生きている一人の人間だと受け止めたことが、俺の実感

の無さにつながっているのだろう。

やがて俺はこんな下らないことを考えるのをやめ、両親との別れを偲ぶのに没頭した。

式が終わって数日、俺は父が社長を務めていた会社に来ていた。理由は俺を引き取った人間にある。そう。今、目の前で自分の秘書に思いっきりぶん殴られているグラサンに白衣というふざけた伯父にだ。

「いい加減に社長らしく振舞ったら如何ですか？この変た・・・もといクズ」

「おい、それ直してるようで悪化してるから」

どうやらこの伯父貴は相変わらずらしい。父もこの伯父の面倒くささには手を焼いていたようだ。子供がいるのにも関わらず、自分の兄貴の妻にセクハラ発言をするのが日常化すれば、何も知らない子供でもわかってしまう。コイツ（伯父）はアホだと。だが父はそんな伯父にハイキックを叩き込んでも、伯父の腕を認めていた。「自分がいなければ『橘』を立派に背負うくらいいけない」と。いわゆる「デキるくせに厄介や人間」なのだ、この男は。

「で？俺のことは結局アンタが引き取るのか？秀治」

「一応な、どうせ親戚連中のとこ行っても、遺産をいよいよに使われるだけだろ？」

確かにそれは間違いない。どうせ俺のことは大金の入った通帳程

度にしか思わないだろう。ここで違和感があるだろうから言っておくが、前述のようなこのアホを「伯父さん」と呼ぶ神経は残念ながら発達しなかった。当の本人も「おじさん」という響きとはまだお付き合いしたくないらしい。一応20代前半だしわからなくもないので密かに30台に突入すると同時に「おじさん」呼ばわりしてやろうと秘書の菊池さんと計画を立てている途中だ。

「そうだな、ならよろしく頼むよ」

「ああ、そんでだ。お前を今日呼んだのはこんな話をするためだけじゃない。もう一つ見せておこうかと思って来させたんだ」

「え？秀治が社長の引き継ぎで忙しいからじゃ・・・」

「そんなもん、サボるに決まってるだろ面倒だs・・・いや、仕事よりもかわいい甥っこのほうが大事だろ？」

後ろで菊池さんがガラス製の灰皿を手を取ったのを察知したか。惜しい、本当に惜しい。ほら、後ろの菊池さんも舌打ちしてる。

「はいはい、そういうことにしとくよ。で？その見せたいものってのは？」

「んー、お前の親父と俺が制作に関わってたIS」

「！！！！！！」

「なんだ知らなかったのか？ウチはそれなりにデカいし、兄貴は開発者に以前から目をかけてた。もっといえば兄貴じゃなく俺の後輩にだが・・・」

「後輩って、篠ノ之博士がか？」

「どうやら変人と変態はどこかで交わるものらしい。ということは織斑姉とも知り合いなのか？このアホは。」

「もしかして織斑千冬って人とも？」

「なんだ？やけに知りたがるな？」

「友達のお姉さんなんだよ。そいつとはよく遊ぶし」

小学校の友達の中でも比較的古い部類だ。確証がない時から興味本位で付き合ってた遊んでいた。そのうち、原作とかどうでも良くなつたけど。ただ何度か見たあのお姉さんの雰囲気は何と言うか落ち着かない。ブラコンであることは知識として知っていても、生物学的な危険信号のほうに優先されたようだ。

「そつえば、弟いるとか言ってたか。まあ、後から適当に聞くとしてとりあえずお前にISを見せるわけなんだが、お前覚えてるか？1、2年前に遊びに来た時誰もいないのをいいことに置いてあった機械触って兄貴に怒られたの」

「ああ、あの時のことか。あそこまで怒った父さんは初めて見た」

「そりゃそうだ。今後の産業の中心になるんだから。もっと言えば不完全ではあったが、あれがISな」

「あれが………っておい！ちょっと待て、じゃあつまり」

「ああ、そついつこと」

ISを動かせるのは現在の時点でも女性だけとなっている。今まさに女尊男卑の世界に移り変わりつつある。その中で俺が「動かせる男」の存在が確認された？はつきり言ってマズイ。ここで俺が表に出れば原作のように凝り固まった常識とはならないだろうが、現状ではあまりにも手薄だ。俺を守るのはこの会社、『橘技研』のみ。しかもISの発表から1年ほど。まだ世界は揺れに揺れまくってる。この状況でモルモットとなるのは、今後どうなるかわかったもんじゃない。

「アンタが俺を引き取ったのはそれもあるってことか」

「相変わらず可愛げのないお利口っぷりで助かるわ。そつ、お前はそのままいけば先の無いモルモットに内定する。だから俺はここでお前の存在を匿うことにした」

「匿う？」

「このことを知ってるのは俺と菊池、それと一部の技術者とさつき言った後輩二人のみだ。お前には今計画が進んでる『IS学園』の入学規定年齢になるまで、この中で簡単な操縦や知識の習得、それから専用機の開発に協力してもらう」

「拒否権は？」

「あつてもモルモットの内定書しか出せねえけど？」

「……………だろうな」

「じゃあ、決まり。どうせ4年くらいあるんだし気長に待ってるよ。禿げるぞ?」

「お前より早くは禿げねーよ。30から来るって話だし」

俺は来ねーよとか聞こえるが無視する。しかし、やっぱりだ。あれは第三者から見れば羨ましいが、当事者になればろくなことがない。ほぼ女子高に通うことは男として楽しみだが、現状よりマシになっても常にデータが取られることは間違いない。ケージのモルモットからスイートルームのモルモットに変わったようなものだ・・・いや、なったものは仕方ない。一度死んだ身、腹をくくるのもそう時間はかからない。なったらなっただで楽しむだけだ。俺はそんなことを考えながら、この後に続く秀治のアホ話と今後の日程、IS開発の話と小学生に詰め込むにはふざけてんのかと思う内容をこなしていった。

ブログ2（後書き）

どうでしたでしょうか？少し無理やりでしたよね。自覚があります（笑）

しかし、正直なところ今の自分にはこれが限界だったりしますので。今後もお付き合いいただけると幸いです。次回は主人公設定と現時点での専用機の設定を投稿する予定です。

主人公紹介

主人公：橘浩之

前世は就活に精を出していた大学生。お決まりの如く自動車にはねられ、『IS』の世界に転生する。名前は変わらなかったが両親は変わっており、家柄も以前よりは良くなった。1歳の頃に転生し、11歳で両親を交通事故で亡くす。その際アホ（伯父）である橘秀治に引き取られる。

趣味・特技

音楽を聴くこと、運動全般、前世から引き継ぐアニメ観賞、空間認識能力

容姿

イメージは「機工魔術士・enchanter」の叶晴彦を茶髪にした感じ。

性格

基本的には気のいい性格、ただし、自己中心的な思考をしている部分もある（基本的にはそのまま行動に移すことはしない）。叔父である秀治の性質の悪さには呆れているが、一方で自分もその立ち回りをする一面があり、同族嫌悪に近い（ただし、秀治のほうが周りに与える被害が大きい）。普段の会話や内心はツツコミに廻りがちなので、話のペースを握る際にはボケ・イジリに入る場合がある（この辺は本質あるいは秀治からの悪影響だと思われる）。長いものには巻かれつつも裏でこっそり切りこみを入れるタイプ。

前世が大学生だったため、学力はそれなりだが頭がいいわけでは

ない。IS学園に入学するのが決定したが本人は気分任せに任せて楽しむ予定。ただし、それとは別に学園生活で、これからの「道」を見つけないと考えている。ほぼ女子高なので彼女が作れたらなお良し、と考えているが原作ヒロインとのハーレムや特定のヒロインを落とそうという思考は今のところない。(すでに現実を受け入れているため、キャラクターとして認識しないようにしている)一夏とは小・中学校と友人(一応、幼馴染でもある)。篝は元クラスメイトで顔見知り程度(剣道をやっていたわけではないので、一緒に遊ぶことも少なかった)。鈴は幼馴染(知り合ったのが一夏と同じ時だったため)。千冬には鈴同様苦手意識あり(昔よりはマシになった)。

父親が取り仕切っていた『橘技研』はIS開発に協力していたため、比較的早い段階からISが研究されていた。両親が亡くなる1〜2年前に何の機械かもわからずに触れたことで男でありながらISの適正があることが判明。しかし、ちょうど目撃していたのが父親・伯父・菊池のみだったため、父親が将来を案じて事実を隠ぺいした。また、父親は『IS学園』ができるまでの間、息子の安全を確保するため、規定年齢になるまで事実を世間に公表しないと考えていた模様。この方針は秀治が引き継いだ。

引き取られると同時にIS訓練・専用機の開発がおこなわれる(秀治がごく少数の信頼できる関係者以外は知らない)。

専用機：黒雛くろひな

分類：第3世代機

待機状態：腕輪

基本的なモデルは「OO」のアルケー。一部コードギアスのKMFの発想を取り入れている。

基本装備：ファング×10

シールド（左腕に装備）

ハンドガン（左腕のシールドに隠れるように搭載）

スラッシュハーケン×3（右腕・両腰に装備）

ビームダガ ×2（エクシアと同じ場所に搭載）

ビームサーベル×2（両足つま先に搭載）

後付装備：バスターソード（刃にビームを展開することが可能、アルケーと同様にライフルとしても使用できる）

ビームランチャー（アインのGNランチャーを3分の2程度の大きさに小型化）

単一仕様能力：黒天喰楼こくてんがらう

シールドエネルギーを消費することで使用できる。バスターソードで斬りつける、あるいは腕で掴むことで相手のシールドエネルギーを『喰う』。そのため、戦闘中にエネルギーを奪うことで補給が可能。相手に与えるダメージは『零落白夜』と同等。能力使用に消費するエネルギーは能力の効果によって奪うエネルギーよりも少ないので、使用する自身のリスクはあるが戦術的な効果は大きい。

カラーリングは屋気楼に近い。また、ビット兵器はセシリアのように制御に集中しなければ使用できず、同時に別の武器を使うことができないが、浩之は制御の比較的複雑な動きを制限することで同時に接近戦や射撃を行うことができる。ただし、制御が甘いのであくまでそれ以外の戦い方のサポート・牽制・追い打ちとして使用する。

主人公紹介（後書き）

このようになりました。名前の元ネタはキーワードに入れてないですが、名前だけなのでご勘弁を。

前夜と目標と鞭と変態（前書き）

諸事情により、原作突入と前話書きましたがもう一話付け足そう
と思います。

前夜と目標と鞭と変態

「作者も馬鹿だよな。『次から原作に入りまあ〜す（はーと）』とか言っておきながら今日は前日だぜ？」

「馬鹿はお前もだよ。ていうか、いきなり色々壊すのやめろよ。」

「まあ、それは置いておいて・・・おまえはもちろん知ってるよな。ちーちゃんの弟が『IS』を動かしちゃまって『IS学園』に入学するのは？」

「ちーちゃんはやめたほうがいいぞ。あの人のキャラ的に合ってない。ついでにお前の命もない。」

「そこで俺の命が二の次なのはなんでかなあ、おい？」

「お前だから、としか言えないな。で、一夏の話なら本人からも聞いている。もう俺のことについても直接知らせてあるよ。けど、本来予定していたものとは状況が変わってきたな・・・」

そう、俺たちが4年前から、進めていた計画は失敗こそしなかったがイレギュラーがあった。それももうひとり「ISを扱える男」が現れるという特大のイレギュラー、しかも世間的には「世界初の男」として現れるときた。といっても俺個人にとってはイレギュラーでも何でもない。元々『織斑一夏』はそういう存在だということ。は『前』から知っていたんだから。焦ったのは秀治たち、裏でイロイロやらかしている面子だ。このニュースが流れて半日もしないうちに俺の存在を表に出したのだから。すでに一夏の存在が世界中に流れてしまった以上、俺のことを隠しておく意味がなくなってしまう

ったのだ。そのため、次の日にはISに乗れる男は二人となっていたのである。

「結果オーライではあったけどよかつたんじゃないか？どうせ明日まですることだったのが、一ヶ月くらい前に終わつたんだし。」

「まあ、確かにな。でもマスコミの対応に備えてなかった俺はカッコよく映れなかっただろうが」

「カッコよく？鏡見たらどうだ??」

アホ面にグラスンっていう珍獣しか見えないけどな。

「俺はテレビ映りには自信がある。」

この根拠はどこにあるのだろうか・・・まあいいかこんなどうでもいいこと。重要なのはそこではない。そう思いつつこの4年を振り返る。

あの日、俺が秀治に引き取られてから、俺はISの基本的な知識の習得・基礎訓練・専用機開発を行ってきた。知識の習得については本や資料に目を通して秀治や技術者の人たちに聞いたくらいだが、基礎訓練は俺自身の身体能力、戦闘技術や判断力の向上が主で隠さずにジムなどでも平気で行うことができた。問題は専用機の開発だ。これに関してはまだ第二世代機もできていない時期からのことなのでかなり難航した。専用機自体の構想はある程度定まっていた。それは原作で言う第四世代に比較的近く、「あらゆる状況に対応可能な戦闘特化のIS」だった。これは元々ISが軍事的な面で使われやすいことから、早い段階であがっていたのだ。

この構想を知った俺は「ある機体」達を連想した。一つは「コードギアス」の機体、もう一つは「機動戦士ガンダム00」のアルケードだ。個人的な趣味もあるが、どちらも対応できる状況や対象の数

が多いという共通点があり、それが魅力的だったのだ。操縦者である俺の提案を反映させて開発されたため、装備のほとんどが実験的なものになってしまったが、訓練データによって有用性自体は十分証明された自慢のISだ。セカンド・シフトに移行できたのは予想外ではあったが、むしろ好都合でもあった。

「明日だったか？IS学園の入学式は。」

「ああ、もう荷物も送ってある。っていうかお前さっきの作者への発言忘れたのか？」

「俺と美女を絡ませる予定を全く立ててないヤツのことなんぞ覚えてやる義理もないね。」

「……無視しよう。どうせ叶うわけがないことは俺でもわかる。」

「そういえば、小耳に挟んだけど千冬さんが教員なんだって？」

「らしいな。鞭とか持ってたら画像送ってくれ。今後のネタにするから。」

「そんなくだらないことで命かけるわけないだろ。俺にも学園には目的があるんだ。」

そう、目的だ。俺は確かに転生した人間ではあるが、その知識を使ってやりたい放題するのは、性に合わなかった。俺にはそんな度胸もなかったし、それを正しいとも思えなかったからだ。だから自分なりにあの学園で道を見つけたと思った。『転生者として』ではなく、『橘浩之として』進む道が欲しかったのだ。3年という短さではあるが、俺は漠然とではあるがきつと何かが得られると確信

している。だから俺は俺なりに学園生活を謳歌しよう。『転生者』
ではなく『俺』として先に進むために。

俺は明日、その一步を踏み出す。それがどんな未来になるのかも
知らずに……

前夜と目標と鞭と変態（後書き）

えー（汗）冒頭の秀治が総てを語ってくれました。というか語らせました。実は現在、入社予定の会社でアルバイト研修（外食）を行っているため、時間が全く取れない状況です。そんな先の期待できない状態でも、期待して下さる方には本当に感謝します。では次回には本当に原作突入となりますので、よろしく願います。

入学初日（学園）（前書き）

今回はセシリアファンにはあまり気に入っていただけないかもしれませんが。それと一部に独自解釈が含まれます。また、アニメのセリフがメインとなっていることもあって、原作とは違うところもあるかと思っています。その辺は申し訳ありませんがご了承ください。

入学初日（学園）

この状況をどう表現しよう。そうだアレだ。あの言葉しかない。俺自身に当てはまらなくても心境はまさにアレだ………

「不幸だ」

このセリフは好きではあったが使いたくはなかった。使うときにいいことなんてないんだし。それにしても気まずい。それはもう果てしなく気まずい。周りは前以外は全員女子、しかもそれなりにレベルが高く、キャピキャピ（死語）してる。その中にいきなり放り込まれ、周囲から珍獣を見る目で見られながらも、羽目を外して積極的に話に行けるような毛の生えた心臓の持ち主ではない男子二人というシュールな構図だ。アニメのワンシーンではあったがここまでできつuitとは思わなかった。それに俺こと橘浩之は「た」行。もう一人の男である織斑一夏とは席が離れているのだ。

だが俺には分かる。雰囲気でわかる。あの背中から感じるプレッシャー、きつとおれも似たような感じだろうから………そんなことを考えていると前のドアが開き教師と思われる女性が入ってくる。

「みなさん、入学おめでとう。私は副担任の山田麻耶です」

そういえばこの人、この前の試験官だったか。一夏によると試験で盛大にやらかしたらしいが、俺の時は元・代表候補生だっただけあって普通に強かった。武器やリーチの違いはあったが、スタイルの根幹は似ていたため学ぶ部分も多い人物だと感じた。俺の場合はどちらかというと接近戦がメインではあるが、相手の動かし方や武器の選択の速さは見習おう。

そんなことを考えていると自己紹介の順番が一夏に回ってくる。っ

ていうかあそこまでガチガチだとこつちまで緊張してくるからやめてくれ。いつそファンキーでクレイジーにやってくれよ。主に後の俺へのハードルを下げるために……

「ええ、えつと、織斑一夏です。よろしく願いします」

普通だ。何のひねりもない。清々しいまでにノーマルだ。ん？深呼吸？

「以上です！！」

ついていた頼杖が外れたじゃねえか！！返せ！俺のあこの平穩を返せ！！

そんな感じで悶えていると、前方の一夏も悶え、その前には未だに生物的危機を感じさせるお方が一人。悶えている友人の姉、織斑千冬さん。この人が担任なのはこのクラスに入った時点でわかっただけだが、やはり目の前になると違う。彼女が怖いというわけではない。知識と成長した心が合わされば、昔よりはました。でも根本的なものは取り除けなかつたらしい。きっと鈴もそんな感じなのだろう。そう思い、窓から見える風景を眺めながら、まだ中国にいるであろう同類の残念体系の幼馴染を想う……あつ、どこからか殺気が二つ

ズバン！！！！

「！！！！？？？」

「お前も仕置きが必要か？橘？」

「い、いえ、問題ないです」

一つは結構近場だった。というか生命の危機を感じた。遠くから来た殺気が少し委縮したのは勘違いだろうか。

「静かに！諸君にはこれからISの知識を半年で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ」

『はい！』

まるで軍みたいな統制だ。女の子ばかりなので、そこまで厳しくないが目の前の教師（教官？）はそのままだろう。山田先生に進行が変わるとガラツと雰囲気が変わる。まさに飴と鞭だ。秀治に報告するなら「鞭そのものだった」と言うだろう。報告すれば命が危ぶまれるのではないが……

さてさて、楽しい休み時間……のはずなんだが、すでに俺たちと女子の間で距離ができていく。決して悪意があるものではないのだが、あまり気持ちのいいものではなかった。とりあえず、孤立は本意ではないので一夏の机に向かう。

「お互い苦労しそうだな、一夏」

「ああ、思った以上にきつい。それに……」

「アレのことか？」

俺が今いるちょうど後ろ、一夏の席の横列、その窓側の席にいる

篠之乃筭を親指で指す。

「ああ、6年ぶりに会ったからなのか、ものすごい無視されてるんだ。俺、もしかして嫌われてるのか？」

「お前が嫌われるとすれば、ソレの性質の悪さくらいだろうよ。まあ、気にするな。嫌われてはいないようだし」

「えっ？」

「ほら、御用みたいだぞ」

「ちよつといいか？」

「へ？あ、ああ」

「久しぶりだな。覚えてるか？一応、遊んだりしたことはあるんだけど」

「ああ、覚えてはいる、一夏と話したいことがある。少し席を外す。」

覚えて『は』、ねえ。流石姉妹、そういうところは姉ほどではないにしてもあるらしい。一応姉のほうには秀治つながりで紹介してもらった。親父のこともあったのか、普通に話すくらいには仲良くなれたが、周りにいた人間が話したときの豹変ぶりには最初、啞然としたものだ。

「ああ、時間には戻れよ。俺やこいつみたいにしばかれるぞ」

「お前、食らってないだろ」

「あれはお前が悪い。ほら、行くならもたもたするなよ。時間がないぞ」

「あ、ああ、じゃあ行くか、篝」

そろって出ていく二人を見送り、自分の席で暇でもつぶそうと考えていると数人の女子が話しかけてきた。

「ねえ橘君でよかったよね？」

「ああ、そうだけど？谷本さんと夜竹さんと相川さんでよかったよな？」

「そうそう、でも『さん』づけしなくていいよ。クラスメイトなんだし、仲良くやってこようよ」

「そうだな、俺もあんまり他人行儀なのは好きじゃないし、よければこれからも仲良くしてくれよ」

「もちろん。それに織斑君もそうだけど橘君も結構かっこいいし、話しやすそうだからあたしたちが一番乗りでよかったよ」

「ありがと、それを言うなら俺からすればこのクラスの女子全員もそうだよ。っと先生が来たか。じゃあ、続きは授業が終わったらな」

「うん、またね」「じゃあねー」「またあとでね」

さっきまでの不安も問題ないようだ。思った以上に気のいいクラ

スメイト達でよかった。友達が多いほうがいいし、嬉しい。スタートにはいい感じだろうと思いつながら、始まった山田先生の話に耳を傾ける。このあと一夏があることで再び女お・もとい織斑先生にシバかれる以外特に何事もなく、初めての授業を終えた。そして、これが何事もない平穩の終わりでもあった。

「うん？」

「どうしたの？」

授業を終え、谷本たちと話していると一夏に一人の女子が話しかけているのが目に入った。確かあれは……

「私わたくしを知らない！？このセシリア・オルコットを！！？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私わたくしを！！！？」

「ずいぶんと『！』が多い奴だな。実際に見てみるとヒステリック？いや、高飛車なお嬢様って感じが。悪い人間ではないんだろうが、秀治とは違った意味で面倒なタイプだ。」

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

こいつは、本当によくこの学園に知識ゼロで来たな。一応入学してやることやら周辺の知識くらい頭に入れとけよ。まあ、ついこの前まで無縁だったから仕方ないっちゃ仕方ないんだが………
・しょうがない。

「悪い。ちよつと行ってくるわ」

「え？う、うん」

話がつくとは思えないけど、一方的になるよりはマシだ。入学早々トラブルはご免だが、見捨てるわけにもいかない。それに今はちよつと癪に障る。

「代表候補生つてのは、名前通り未来のISの国家代表。その候補に選ばれている人間のことだ」

「浩之！」

「お前、そのくらいは覚えてこいよ。俺らはその候補になるかどうかは別としても、注目されてるって意味では同じだ。あながち無関係で通らなくなるかもしれない連中だぞ？」

「そうなのか？」

「はあ、そうなんだよ。候補生は実験段階のISも含め、専用機持ちがほとんど。要は各国の次世代戦力扱いだ。コアの個数が限られてるなかで、優先して専用機を持てるんだ。いわゆる俺らの世代の中ではエリートってやつに当たるってことになる」

「そう！エリートなのですわ。本来私わたくしのような選ばれた人間とクラスを同じくだけでも奇跡！幸運なのよ？あなたも、そしてそのあなたもその現実をもう少し理解していただける？」

おお、テンションがセルフで上がり始めた。とことんエリート指

向って感じだな。正直、「候補」相手にそこまで幸運には思えない。

「それはラッキーだな」

「ガリガリ君が当たるくらいにはラッキーだな」

「馬鹿にしていますの？」

「俺にとってガリガリ君が当たるのは十分幸運だ。金のエンゼルと比べられるとさすがに負けるが・・・」

「っていかお前から言い出したんじゃないか」

「大体、何も知らないくせによくこの学園に入れましたわね」

「そこは同感だな」

「唯一男でISを操縦できると聞いていましたけど、期待外れですわね」

「ISに乗れるって情報だけでそれ以外を期待するのはそっちの勝手だろうに。しかも返答とは別に不満があるってか？」

「まあでも？私わたくしは優秀ですから。あなた方のような人間にもやさしくしてあげますわよ？わからない事があれば泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくなってよ？」

あ、俺の話は無視してやがりますか。忌々しい、ああ忌々しい、忌々しい。ささやかなお返しはしてやるづ。

「一夏、のび太くんの如くこのセシえもんに頼むと教えてくるとさ」

「誰がセシえもんですか!! まあ、いいですね。聞かなかったこと
にしてあげます。何せ私は入試で唯一教官を倒したエリート中のエ
リートですから」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「はあ!？」

「ちなみに俺は引き分けね」

一応隠しとこう。勝つたには勝ったが、このまま正直に言うとなことにならない気がする。できれば面倒なことは原作通りに行くなら、一夏に全部被ってもらおう。人が増えてもややこしくなるだけだ。

「そうだったのか？浩之？」

「ああ、結構苦戦したんだ。分けられれば十分合格者としての実力
はあるって認められてもいいと思うけど？」

「所詮勝ててないではありませんの!」

「勝てたのはお前らだけなんだから突っかかるなよ、オルコット」

「ぐっ、そ、そんなことよりそのあなた!あなたも教官を倒した
ですって!？」

「倒したっていうか、いきなり突っ込んできたのをかわしたら、壁

にぶつかって動かなくなっただけだ」

「わ、私^{わたくし}だけと聞きましたが・・・」

「女子の中ではってことじゃね？もしくは元々正式な手続きを踏んでの受験者じゃなかったからカウントされてないのかもな」

むしろそっちが濃厚だ。俺の試験も一夏の事件のせいで急遽行つたものだし。本来は入学と同時に情報が表に流れることになっていった。そうすれば外の混乱に直接まきこまれることがないと考えていたためだ。一夏の場合もその場で試験を受けたわけではない。それよりも調査や報告・検査を優先するのは当然だった。後日試験が特別に行われ、おそらく結果を考慮したのではなく、今後のデータを得ることを見越して合格となったのだ。正式な受験生の成績と一緒に報告されるわけがない。

「あなた！！あなたも教官を倒したっていうの!？」

「ええつと、落ちつけよ。なあ?」

「これが落ち着いていられ『キーンコーンカー』・・・」

「はい、終了。続きはまたの機会にやれ。でない痛い目にあうぞ?じゃあ、お先」

まだごちゃごちゃ言ってるようだが、まあ長くは続かないだろう。それよりも明日は我が身、一夏のように受け止めなれてないんだなあ、あの制裁は。食らわないで済むならそれに越したことはない。

それにしても、これはやっぱりまずいな。無視できなかったこと

には後悔してないけど、下手するとこっちにも向ってくる。いや、
いつそ一夏を担ぎあげて俺が話を付けたほうが収まりが利くか？あ
いつが何の知識もなく来たことは言うまでもないんだし。原作とい
うものを知っていてもすべてが思い通りに、原作の通りに行くなん
てありえない。別に変わるというならそれもまたかまわないが、『
IS』に、一夏を主人公とするストーリーに加わる必要は「橘浩之^{オレ}」
にはない。動いてみる価値はあるか……

入学初日（学園）（後書き）

正直、まだまだ決定戦には何話かかかりそうですが、できるだけ早く上げたいと思います。改めてみると浩之はある意味秀治似の部分がありますね。元々、こういった口調にしようと考えていたのですが、後になって気がつきました。

話は変わりますが、今回の地震、実は私はもろに被災地にいます。避難こそせずにいられる状況ですが、断水・食糧不足・原発の放射能など、今後どうなるか分からないのが現状です。入社前研修もできず、震災でろくに自宅から出れないために時間がとれて投稿できているというのも皮肉としか言いようがありません。もし、途中で投げ出さなければいけない状況になっても寛大な受け止め方をお願いいたします。最後に同じ被災者として亡くなられた方とその遺族の方にお悔やみ申し上げます。

三つ巴のクラス代表（前書き）

お久しぶりです。というか長らく更新できず申し訳ありませんでした。なんとかちよこちよこ書き留めていたものを形にしてみました。できれば楽しんで読んでもらえると思います。

三つ巴のクラス代表

「これより、再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める。」

さて、授業は進み、クラス代表の決定の話が始まる。この代表者はクラスの顔であり、実力者の証でもある。みんな真剣に、あるいはものすごくやりたそうな目をしながら目の前の千冬さんの話を聞いている。

「自薦・他薦は問わない。誰かいないか？」

「はい、織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

やっぱりというか、なんとというか、一夏を挙げる声が多いな。

「私は橘君を推薦します！」

「私も橘君に一票です」

あれ？俺も拳がつてる？さっき話した娘達が推薦してくれてるのか。

「他にはいないのか？いないならこの二人からクラス代表を決めるぞ」

「納得がいきませんわ！！！」

来た。ここからが本番だ。さて、上手くいくか……

「男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえというのですか！？」

おお、ちょっとイラツとくるな。悪気があるとかどうとかは別としても男として癪に障る。ん？今度はお国話までか。よし、そろそろ仕掛けてみるか。

「屈辱だなんて随分な言い方だな？それにイギリスって日本とそこまで差は無いだろ。むしろ食では勝ってるくらいだし」

「あなた！私の祖国を侮辱しますの！？」

「先に侮辱した奴がそれ言ったらアウトだろうに。まあ、そんなことはどっちでもいいとして、要はクラス代表が俺が一夏になるのが不満ってことでいいんだな？」

「当然ですわ！女よりも弱い男が代表になるだなんて認められるものですか！！」

「なら俺がお前に勝てば文句ないってことだな」

「ちょっと待てよ、浩之！お前いきなり何を言い出すんだよ！？」

「何って簡単な話だ。オルコット（こいつ）は男（俺達）より自分が強いから認められないって言ってるんだろ？なら俺が勝てば済む話だ。入試で試験官と引き分けた俺がこいつを負かせば、試験官に勝ったお前も自然と認められる。幸い俺達の試験官は同じ人だった

し、俺達だけの成績の差は対比できる」

そう、ようは単純な式だ。試験官が同じである俺と一夏の勝敗にのみ限定した成績は『俺<一夏』となる。そこで俺がオルコットに勝てば、『オルコット<俺<一夏』となる。厳密に言えば成り立たないのだが、広まっている話と認識を考えれば十分な事実になるはずだ。そして、元々一夏の推薦が多いのだから、後でクラス代表として持ち上げても不自然ではない。

「随分と余裕ですわね？負けたらそのまま私の小間使い！いえ、奴隷にしますわよ！」

「なんならハンデも付けてやろうか？女の子の相手するときがつくのもカツコ悪いし」

次の瞬間、クラス中から笑いが起こる。まあ、そうなるだろうな。現在の常識いまで言うところ。

「橘君、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、ISができる前の話だよ？」

確かに、『IS』の発明は男と女の社会的な差を絶対的なものにしてしまった。でもそれは……

「そいつは今までの常識だろ？ISに女だけが乗れたころまでのさ。でも今は違う。ISに乗れる男が出てきた以上、女の絶対性にはひびが入った。そのひびでそいつが崩れるのか、崩れないのか、試すいい機会じゃないか。どうするオルコット？受けるか？それとも逃げるか？」

「いいでしょう、受けて立ちますわ!!」

「話はまとまったな。それでは勝負は次の月曜、第3アリーナで行う。橘とオルコットは準備をしておくように。それから、織斑もその日までにISを動かせるように準備をしておけ」

えっ?何言ってくれちゃってんのこの人?

「千冬ね、じゃなかった織斑先生なんで俺もなんですか?」

「この勝負に直接関係ないとはいえ、クラス代表の候補であることに変わりはない。お前がクラス代表に選ばれたと時に碌に動かせないというわけにもいくまい。そう思わないか、橘?」

「………そうですね」

あ、バレてる。こっちの狙いが完全に読まれてる。ちっ、仕方ない。別に潰そうとしているわけではなさそうだし、このまま押し切るう。それにこれは俺が勝ってこそ成立するものなんだ。へまするわけにはいかない。必ず成功させないと……

「で?お前まさか初っ端から代表候補生にケンカふっかけたのか? いいねえ、若いつて。いろいろとお盛んでさあ、なあ菊池?」

「社長、撲殺と惨殺と毒殺。どれがお好みですか?特別に選ばせてあげます」

初っ端からこのやり取りってどうだろうか。まあ、悪いのは全面的に我が伯父であることは言うまでもないけどさ。初授業を終え、寮に帰宅した俺は秀治と連絡を取ることにした。俺のIS<黒雛>の使用についてだ。できれば戦闘データは多いほうがいいし、俺自身もせっかくの専用機をただ持ち歩くだけにしておくつもりはない。使いどころがあるなら、有効に使ってこそだと思っただ。

「話を続けていいよな。とりあえず今回のもめ事を利用して、『専用機持ちの代表候補生との戦闘データ』を入手しようってわけなんだけど、どう思う？」

「俺は別に悪くはないと思うがね。データが手に入って喜ぶのは俺たちなわけだし」

「そうですね。ただもめ事を利用するというのは今後の浩之君の間関係に響きます。そこは大丈夫なの？浩之君？」

「確かにいきなり問題を起こすのはどんなところでも悪影響でしかない。でも……」

「ええ、うまく友人に動いてもらいますから。一応、入学試験で教官に勝利できたのは一夏とオルコットの二人だけということになっています。俺は引き分けと云ってあるので、印象では二人よりも弱いと見られるはずですよ。でもどうやら俺たちとオルコットの試験官は別の人のようなので、そこをうまく突けば俺とオルコットの勝敗次第で一夏の評価を盾にしなから、結果を出せると思っんです。」

「織斑弟よりも成績が低かったお前がオルコットを負かせば、その弟君の強さを盾にして上手く逸らせるってわけね。まあできなくもないか。お前、言いくるめるの上手いな、兄貴に似て」

「余計な御世話だ。それに父さんには叶わない。今回だってもう千冬さんにはバシてるしな。とりあえずできるだけ早期にそのデータを送れるようにする。必要なら後で、相手のデータをわかってる範囲でいいから送ってくれ」

「仮にも代表候補生が相手だ。何もなしというわけにはいかない。

通信を終え、少し外でもで歩こうと部屋を出る。そして、聞こえてくる男の悲鳴(?)らしき情けない声……

「あいつ、何やってんだ？」

声のするほうに行ってみると、ドアに向かって謝り倒す世界で唯一ISを動かせる男(笑)がいた。そうか、篠之乃に追い出されたんですか。早速、フラグ体質を存分に発揮しやがってるんですか(怒)……おっと、嫉妬は醜いからやめておこう。

「何やってんのお前ら?いきなり朝帰りの旦那さんとその妻みたいになって?」

「は?」

『!!!!!!!!!!!!?????』

今、明らかに部屋の中の主のものすごい動揺が伝わって来たんですけど……これは意外と面白い

「再会したと思ったら、いきなり随分仲良くなったみたいでお兄さんはずれしいね。全く」

「浩之、何言っ「早く中に入れ！！！！！！」ちよっ、今度はなんだよ篤！？」

ボタン！！という音とほぼ同時に部屋の中に消える我が親友。なるほど、俺以上に先が思いやられるな。外に出る気も失せたし、今日はもう寝よう。部屋に戻り、ベットに倒れこむ。

「この世界に原作って考え方が本当にあるなら、俺も随分出しゃばったな。」

この世界を物語としてではなく、現実として受け止めてもう長くなる。でも完全に消えることもまたあり得ない。不安がないわけではない。でも、それ以上に自分が今の立ち位置でどう進めるのが楽しくて仕方ない。

(やっぱり転生者ってまともにようと思ってもどっかでぶっ壊れてんのかもな……)

そんな自虐とともに浩之は眠りに就いた。

三つ巴のクラス代表（後書き）

どうでしたか？自分で読み返して文才の無さに呆れるしかありませんでした（苦笑）

次の更新は未定です。入社した会社がとんでもなく無茶苦茶で、中々休み時間が取れないんです。この3カ月、家にいる休日なんて合わせて4日くらいしかなかったもので（泣）毎日残業で帰ってくるのは次の日という労働基準にケンカを売っている会社にキレそうできれずにいる。そんな状態でもなんとかこっちは頑張りますのでよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8442q/>

IS ~ 黒の座天使 ~

2011年6月10日22時07分発行